

辞書をひくと「誠心誠意」には、「嘘偽りなく、真心をもって事にあたる」とあります。また、『万人幸福の栞（以下、栞）』第十條「働きは最上の喜び」には、「ま心で働いた時、必ず喜びがわく。（中略）おのずからに感ずる喜びは、他のどんな喜びにもかえることは出来ない」と記されています。

\*

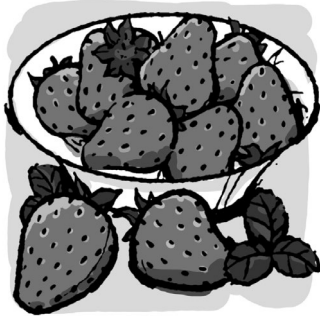
経営者のM氏は、一歳の時に父親を亡くしました。以来、母親が農業とパートの掛け持ちで働き、M氏と三人の姉たちを育ててくれたのでした。M氏は事業が軌道に乗った後、実家を改築して、老齢になっていた母と一緒に暮らすことになりました。

それを機に、母親が仕事を農業だけに専念すると、M氏も仕事は休みの日には農業を手伝い、とても喜ばれていました。

しかし、収益にはつながらないことから、M氏の足は田んぼから遠のいていったのです。母は一人で懸命に農業を続けましたが、やがて体調不良を訴えるようになりました。

農業を終えて帰宅した母はたびたび痛みを訴え、手伝わぬM氏に文句を言うようになり、親子喧嘩が絶えなくなりました。その後、母は骨粗しょう症の発症と股関節がすり減ったことから歩行困難になり、氏は強く説得して農業をやめさせたのでした。

その後、母親は、股関節の痛みを抑えるための手術を受けることになりました。それは医師から「痛みは治まっても、歩けなくなる可能性があるから、覚悟するように」と言われる状況での手術でした。



## 真心の働きで 人生を輝かせる

母の手術後、M氏が『栞』を開くと、「働く喜びこそ、生きていく喜びである」という一節が目にとまりました。母のことを思いつて農業をやめさせたけれど、それこそが母の喜びを、生きがいを奪っていたのだ」と自分の不孝を猛省したのでした。

「農業は、子供四人を命がけで育て上げた、母の生きがいなのだ」と気づいた氏は、農機具一式を購入して、代わりに自分が農業を再開することを誓いました。それを告げると、母は喜びました。

M氏が「手は出さなくていいから、作り方を教えてほしい」と米作りのアドバイスを求めると、母は元気を取り戻していきました。「次は何をしたらいい」と聞くと、楽しんで農業の手順を教えてくださいました。そうしているうちに母親は、翌年には杖をついて歩けるようになり、翌々年には田んぼまで歩いて見に来るばかりか、軽作業ができるまでに回復しました。ついには痛みがすっかりなくなり、杖なしで歩けるようになったのです。

年を追うごとに元気になった母でしたが、手術から数年後、農作業中に倒れ、二年の闘病を経て眠るように息を引き取りました。〈働き通しの人生だった母。「船乗りが船の上で」と願うように、母は、大好きな農業を目いっぱい楽しみながら、天寿を全うしたのだ。なんと見事な人生だろう〉と亡き母を慕うM氏。現在、精魂込めて事業に邁進する傍ら、遺志を継いで田んぼを大きくしようとして農業にも汗を流しています。